

志木くんは、

セフレのままじゃ

あなたを諦めきれない。

「別れました……」

「おー……とうとう？　じゃあ、今日は祝賀会だね」

これはおめでとうのカルビだよ。そう言って、志木くんは焼いた肉を私の皿に入れてくれた。



「祝わないで！　めでたくもないよ！」

「でもお前ずつと疲れてたじゃん、別れそう別れない、やっぱ別れた方がいいのかなって、もうずーっと」

「……それで言うなら、慰労会じゃないの？」

「そうかも。じゃあお疲れ様だ」

てかどんどん食いな、皿に溜まっていつてる。網の上の野菜をひっくり返しながらそう言ってくれる志木くんは、会社で唯一の同期の男の子だ。男子も女子も最初はもっと沢山いたはずなのにいつの間にかみんな辞めてゆき、気づいたら私と志木くんの二人だけになっていた。でも私が志木くんと話すようになったのはそうやって二人になってからだ。

もう俺たちの代、俺とお前しかいなくなっちゃったね。去年の会社の忘年会で、沢山お酒を飲まされて頬を赤くした志木くんは、そう私に喋りかけてきた。

みんな酔っていて、私たちが二人でいることなんて誰も気にしていない会場の隅で、志木くんと沢山話をした。最近の仕事の話、クライアントの話、上司の話。最後に喋ったのは確か入社したばかりの新人の時だったから、こんなに喋りやすい男の子だと知らなかった。次に会社の

給湯室で顔を合わせた時、コーヒーを淹れながら志木くんは私に言った。ねえ今度飲みに行こうよ、この間は仕事の話ばかりだったから。

それから定期的に仕事終わりにご飯に行くようになった。タイミングが合えばランチも行く。私が生まれて初めての彼氏が出来たことを志木くんに話したのも、今日と同じ焼肉屋だった。いい歳して初めて誰かの恋人になったことを、志木くんは引きも笑いもしないで、良かったねと肉を焼いてくれていた。

「というか、志木くんにあんなに相談乗ってもらってたのに、申し訳ないって言うか……」

マッチングアプリで出会って付き合った人と上手くいっていたのはほんの最初だけで、あとは一緒にいてずっと違和感の連続だった。でも一

度付き合った人をすぐに切り捨てることが出来るほどの経験値は私にはなく、どうやったら上手くいくんだろうと、付き合いながらずっと頭を悩ませていた。そんな中、ランチのお店の列に並ぶ最中に「最近彼氏とどう？」と志木くんに聞かれた時、はっとした。彼に、相談すればいいのでは？

志木くんはモテる。社内の恋愛事情や、異性のそういう話題に疎い私でもわかるぐらいに。付き合っていたと噂されている女の先輩が沢山いて、仕事の相談をする後輩の女の子が絶えなくて。と思ったら男性からもしっかり好かれている。一度仕事をしたクライアントは次から絶対志木くんを指名するらしい。

喋り方がちょっとゆるくて、適当そうに見えるけど話すと全然適当じゃない。余裕があって落ち着いてるけど、笑う時は大口を開けて笑

う。それを知ってみんな志木くんを好きになる。だからあんまり喋ってこなかったのだ、そんな男の子と仲良くするには敷居が高すぎる気がして。でも唯一の同期という手札を手に入れた今の私は、思い切って志木くんに全部打ち明けた。

彼氏にこういうことを言われたんだけど、私はこう思ってた。私はこうしたいんだけど、彼氏はこういう人で。志木くんはいつものようにゆるゆるした喋り方で、でもちゃんと話を聞いてくれた。じゃあ今度はこうしてみたらいいんじゃない。毎回さりとアドバイスをくれた。次に話すときにやっぱり上手くいってないと伝えても、笑ってランチのパスタを口に運びながら、また話を聞いてくれた。私のことも、彼氏のこと、志木くんは絶対に否定しなかった。私はそれに、なんだか凄く救われたのだ。

「まあ俺は、さっさと別れた方がいいとは思ってたよ」

「え!？」

ここまで絶対に出てこなかった初めての否定に、驚いて大きな声が出た。

「明らか変な男だったろ、別れられて良かったね」

「……な、なんで最初から言ってくれなかったの!？」

「だってお前はそいつと上手くやりたかったんでしょ。それを俺が否定するのはなんか違うじゃん」

驚いている私を前に「もう別れた後だから言うけどさ」と志木くんは続ける。空いた私の皿に火が通った野菜を放り込みながら。

「お前が話し合おうとしたり、上手くやろうと頑張ってたのに、それを受け入れられないその男に、大した価値なんてないと俺は思うけどね」

だからそんな奴のためにお前が落ち込むことなんて、ひとつもないよ。グラスに残っていたビールを飲み干して、志木くんはそう言った。焼いてもらった野菜を食べながら思う。この人って、すごいんだよな。飲んで笑って消化されそうなこんな話題でもいつも淡々と聞いてくれて、しかも私が欲しい言葉をさりりとくれる。「志木くんってすごいよね」と思わず漏らすと、何がだよと流された。

そんな志木くんの顔を見ると、聞いたことのある噂をふと思い出した。やっぱり本当なのかな、どうなんだろう。好奇心に逆らえずに、うっかり聞いてしまった。

「志木くんってやっぱり、女の子にこう、慣れてたり、するんだよね……?」

「何それ、遊んでるかってこと？」

志木くんは笑いながらそう聞き返した。

モテることでは有名な志木くんは、だいぶ遊んでいるらしい。モテるのは見ていたら分かるけれど、そんな噂がどこから発生したのかはわからない。

遊んでる女の子が沢山いるけど、誰にも本気にならないらしいよ。そう教えてくれたのは早々に会社を辞めた同期の子だった気がする。その時はへえそうなんだぐらいにしか思わなかったけど、仲良くなってみるとそれが本当なのか嘘なのか、逆にわからなくなった。いつもどこか優しいけれど、子供みたいにからかってきたり、冗談みたいに辛辣なこと

を言ってくることもある。そしてきつとこの人は、女の子の扱いがとても上手い。今現在進行形でそういう扱いを受けている。

「ごめん、そういうわけじゃなくて、その、そういう経験値が高いのになって……」

流石にデリカシーがなさすぎると思い、慌てて謝った。そういう噂は本人の耳にも届いている気がする。申し訳ないとは思いつつも、その上でどう返されるんだろうとちょっと気になって、向かいの志木くんの顔を控えめに見つめてみた。口角を上げて、何を考えているのかよくわからない綺麗な顔と目が合ってしまう。

「……ふふ、どうだろうね？ 想像に任せるよ」

やっぱ慣れてるのでは？ 否定しないその返事に、噂は本当なのかもと思った。誰にも本気にならなさそうなもの、ちょっとそれっぽい。志

木くんが誰かに夢中になって、恋愛で失敗してる姿なんて想像できない。少なくとも私みたいに、初めての恋人に浮かれたり落ち込んだり疲れ果てるようなことはないだろう。

そう考えているうちにも志木くんは私の手元の空になったグラスを見てメニューを差し出し、店員さん呼び、私の分と自分のお酒を注文してくれて、網まで変えてもらっていた。このスマートさ。冷静で、余裕があつて、かつこいい。なんだか虚しくなってくる。私がこうなるには、こんな風に恋愛や異性関係をうまくやれるようになる日なんて、一体来るんだろうか。

私が頼んだサワーが運ばれてきて、志木くんが持ち手を向けて渡してくれる。ありがと、と受け取ってそのまま半分ぐらい一気に飲んだ。ア

ルコールが頭に回る感覚がして、そのまま緩んだ頭のまま、うっかり私は口にした。正直考えたことはあったけど、絶対口にするべきではないことを。

「あの、志木くん」

「なに？」

「その……私の想像通りなら、一個お願いが、あつて……」

「うん？」

「笑って断ってくれて良いんだけど……怒ってくれてもいいし……」

「うん」

「彼氏が……もう元彼だけど……初めて出来た彼氏って言ったでしょ」

「言ってたね」

「で、それも、今回数ヶ月足らずで別れたわけで」

「そうだね、三ヶ月ぐらいだね」

「うん、あのね、だから私……まだ、経験が無いのを、なんとかしたくて……」

「経験……」

ここまで話していて、とんでもないことを言おうとしている自覚がようやく生まれた。いやもう手遅れかもしれない。こんなの男女逆だったら即セクハラだし、逆じゃなくてもそうだ。よく考えると遊んでるっていう噂が例え本当だとしても、こんな身近な人間とは遠慮したいだろうし。ごめんやっぱ今のなし、と撤回しようとしたのに、志木くんが反応する方が少し早かった。

「俺に……俺で？」

俺で、なんとかしたいって話？　いきなり核心をついた返事をされて、もう逃げ道がなくなってしまった。話が早すぎる。もはや誤魔化しきれなくて、顔が見れないまま私も返事をする。

「えっと、あの、ごめんほんと、本当嫌じゃなかったらって話で、でも忘れて？」

「んー……じゃあつまり、俺としてみたいってことでいいの？」

「……う、ん……はい……」

なんで敬語、と私の震える返事に志木くんは笑った。

笑ってくれている。ドン引きされる覚悟があったし、されておかしくない事を言ったのに。ああでも優しい人だから、わざとそう振る舞っているだけかもしれない。それでもこの態度。志木くんってやっぱすごい！　さすが同期の中で一番最初に出世した男。目の前の現実が怖くて

どうでもいいことを考え出していると、向かいから志木くんの腕がすつと伸びてきた。

「なんかどうでもいいこと考えてるでしょ」

そう言いながら、指先が私の頬をつついた。狭い焼肉屋の個室では、志木くんの長い腕は簡単にこちらに届く。指先はそのまま頬を撫でてきた。そっかあ、ふーん。独り言のように志木くんは呟きながら、するりと私の顔をなぞる。細くて長い指先の感触。もしかしてもうなんか始まつてる？　これ。

志木くんはさっき来たばかりのお酒を手にとって、ぐいと飲み干した。カタンと音を立てて空のグラスがテーブルに置かれる。そのまま立ち上がって、座ったままの私を見下ろしながら、言った。

「いいよー、俺で良いなら♡ いこっか？」

微笑みながら言う志木くんは、どこに、なんて聞くのは野暮だと思った。



あまりにも自然な手つきで手を引かれて店を出て、引かれるがままに着いていく。全然知らない道だったけど、どこに行くかぐらいは察しがついていた。

察してしまうと逆に喋れなくなってしまう。天然のふりでも出来たら「どこ行くの？」とか聞けたのに！ 繋がれた手の熱を感じながら黙っているのがどうにも居た堪れなかった。そんな緊張に耐え続けているう

ちに、気づいたら入口に休憩や宿泊の文字が並ぶ建物に囲まれていて、自分が言ったことの実感が湧いてくる。

なんであんなこと言っちゃったんだろう。なんで志木くんはあんなお願いを聞いてくれたんだろう。これからも会社で会うのに、どうしよう。そんな気持ちで頭がいっぱいで、志木くんの「ここでもいい？」も「部屋これでいい？」も私はろくに聞いていなかった。辛うじて口から出ていたらしい間抜けな返事を聞いて、「ねえ魂抜けてるじゃん」と大口を開けて笑われたことだけは、分かった。爆笑している顔が、ちよつと可愛かったから。

ホテルの部屋がガチャリと開いて、玄関の精算機と薄暗くてオレンジっぽい照明が目に入り、部屋に足を踏み入れた瞬間、ようやく魂が戻ってきた。え、やっぱこれやばいかも。靴を脱ぎながら「シャワーど

うしよっか？ 先入る？」などと聞いてくる志木くんの言葉を遮って、声をかけた。

「し、志木くん、怒らないの？」

「え、なんで？ 怒って欲しかったの？」

さっきまでいた焼肉屋での会話の続きみたいな軽いトーンで、志木くんは喋る。

「そんなこと簡単に言っちゃダメだよとか？ そうして欲しいなら失敗したかも」

「いや、そっちじゃなくて……こんなセクハラみたいな事言われて、嫌じゃないの？」

「こんなって？ 『志木くんで処女卒業したいです』ってこと？」

羞恥で死にたくなる。言わないでほしい。言ったのは私だけ。そこまでは言っていないけど。いや言ったのかも。

「う、あの、変こと言って申し訳ないと思つてて……ここまできてあれだけど……」

「別に俺はいーよ、だから来たんだし」

入口でもたもたしている間に、志木くんはさっさと部屋の中に入ってしまう。置いてあるハンガーラックにスーツのジャケットを掛けて、ネクタイを緩めながら大きいベッドに腰掛けた。早くおいでよ、座つて。隣をぼんぼん叩いて座るところを指示される。言われるがままに隣に座った。

緊張で俯いて床とつま先を見ていると、志木くんの身体がぐつと近づいて顔を覗き込まれる。床に映っていた自分の影は、大きな影が被さつ

て見えなくなった。「こっち向いてよ」と言われて、至近距離の顔に視線を移す。まつ毛が細くて長いんだなって、初めて知った。こんなこと知っていいのかな。ただの同期なのに。

「……逆に本当に俺でいいの？ お前は」

耳元で小さく尋ねられて、聞き慣れた声なのにぞくりとした。志木くんの声って、こんなだったっけ。

「ちゃんと言わないと、やめてあげれないよ。全部しちゃうよ、俺」

これを断れる女の子っているんだろうか。そう思うぐらい志木くんの声が耳に入ってくるとくらくらした。力が抜けそうなのに脚には何だか力が入る。自分が変な顔をしていないか不安だったけど、恐る恐る顔を上げると見上げた先の志木くんは思ったより真面目な顔をしていて、「どうする？」と私に聞いた。

「……本当に、いいの？」

「いいよ」

「初めてだよ……？」

「ふふ、そっかー」

「……やっぱ慣れてるの？」

「想像に任せるって言ったでしょ？」

密着している身体がじりじりと押し倒されて、ぽすんと背中がシーツに沈む。見上げた先の志木くんは笑顔に戻って、「気になるなら確かめてよ」と言った。



シャワーはいつか、おんなじ匂いしてるもんねどうせ。そう言う志木くんからは凄くいい匂いがしていて、自分が同じだとは到底思えなかった。こんなに他人と近づいたことがないから、香水なのかそうじゃないのかもわからない。服を脱がされている間、不安を誤魔化すために口を開いた。

「志木くんって、香水とか何かつけてるの？」

「え、仕事の日はずけてないよ」

「なんかいい匂いが……」

「んーワックスじゃない？ 多分」

腰上げて、と言われて下の服をするりと脱がされる。ブラのホックを外す為に腕が私の背中に回されて、ぎゅっと密着した。志木くんの首元からまたふわりと匂いがして、鼻を近づけてスンと嗅いでしまった。

「っ、なに」

くすぐつたい。ちよつと慌てて志木くんが首を押さえた。

「ワックスじゃない気がする」

「……なんか余裕じゃん？ 初めての割に」

ブラが取れて全部晒してしまう状態になった時によく恥ずかしくなつてきて、意味もなく腕で隠すと「何隠してんの」と腕を掴まれる。そのまま志木くんの顔が近づいてきて、反射で目をつむった。でもそのまま待っていても唇には何の感触もなくてそつと目を開くと、目の前には志木くんの顔がある。どうしたんだろうと思っていると、そつと口が開いた。

「……………元彼と、キスはした？」

「え？ あ、えつと」

「あゝごめんやっぱ無し！　言わないで、俺寝取り属性とかないから……」

「ねと……？」

「いや別れてるから違うんだけど……でもやっぱ言わないで」

変なこと聞いてごめん、と言った後、志木くんは私のおでこにキスをした。

「キスはやめとこつかなあ、同期だし……」

うん、と何も考えずに返事をしたけど、何でダメなんだろうと思った。おでこはいいのに、今からセックスしちゃうのに。別にしてもいいのになって、本当は、ちょっと思ってしまった。

「てかさ、いつもこんな可愛い下着つけてんの？」

床に落ちてしまったブラを見ながら、志木くんの手は胸を持ち上げるようにふにふに触れる。

「こういうのが好きなん？ それとも、なんか考えて付けてきたの？ いや、そんなわけではないか……」

変なの着けてなくてよかったと内心で思った。ちゃんと上と下セットでかわいいーね。そう言いながら指先が乳首に触れてきて、あ、と小さい声が出てしまった。すりすりとはぜられるたびにん、ん♡ と身体をもぞもぞさせてしまう。小さい刺激は恥ずかしいけど気持ちよくて、されるがままに受け入れていると志木くんの頭がそこに近づいた。

「っあ、ん……♡ あ、舐め……♡」

舌先に乳首が触れて、軽く吸われる。知らない感覚に身体が逃げるように反ったのに、志木くんの腕は私の身体を掴んでそれを逃さなかった。

舐めながら「痛くない？」と聞かれたけど全然痛くない。頭の奥にぴりぴりした甘い刺激がずっと走って、声が出る前に身体がびくびく動いてしまう。

「乳首好き？ 先っぽ気持ちいいね、いっぱいびくびくしていーよ♡」
まだ始まったばかりなのにこんな反応して、変じゃないのかな。抑えてるつもりなのに全然バレてて恥ずかしい。わざと音を出すように、ちゅ、と吸われてちゅっただけ引っ張られると、あ♡ と大きい声が出てしまった。

触られてるのは乳首なのに、下がじくじく熱い。刺激を与えられるたびに太ももの間の奥がきゅうってなるのがわかって、もぞもぞと脚を動かしていると、志木くんが「下で感じちゃった？」と恥ずかしくて答えられないことを聞いてきた。

閉じていた脚が志木くんの手で簡単に開かれる。パンツに指をかけられて「待って」と流石に言った。なんにも待つてくれなかった。下着の中が丸見えになったことに耐えられずに目を閉じている間に、するりと脚から抜かれてブラとおんなじところに落とされる。

「し、志木くん、まってっ、ま、っ、あ♡ あ……っあ♡」

「あ、濡れてる、よかった。うれしーな」

「は、あ♡ やだ……！ あ♡ っ、ん♡」

「はは、ぬるぬるになっちゃってんのが恥ずかしーの？」

やだって言っちゃダメかも、私がお願ひしたのに。そう一瞬思っただ、私の咄嗟に口から出た「待つて」も「やだ」も、志木くんはうまく拾って放っておいてくれる。濡れてる脚の間をゆるゆると撫でて、中から出てきた体液はくちゅ、と音を立てて、たまに指先だけが中に入っ
た。

「や、やだ、恥ずかし、いや……っ♡」

「だいじょーぶだよ、とろとろに濡らしてんの、かわいいーよ♡」

私の子供みたいなイヤイヤのたびに小さい声で宥めてくれるから、ひ♡と喘ぎ声に変わってしまう。焦った刺激でどんどん頭がぼーっとしていくのを感じていたけれど、目の前の志木くんを見てふと気づいたことを口にする。

「志木くん、服、脱がないの……」

私はもう何も身につけてないのに、志木くんはまだ首元に緩めたネクタイがついているぐらいだ。不公平、と思って不満も含めた質問だった。しかし志木くんは真顔で答える。

「えー……脱がない、まだ」

「なんで……？」

「ちんこすげー勃ってて恥ずかしいから」

口を開けたまま返事ができなくなった。志木くんて、そんなこと、いうんだ。なぜか私の方の顔が熱くなってしまう。でも恥ずかしいというのを理由にする理不尽さに、なんとか言い返す。

「わ、わたしだけ脱いでて、ずるい……！」

「……んーじゃあ、ちょっと触って、ほら、ここ」

志木くんは私の手をとって、引いた。スーツのスラックス越しの熱に、ぎゅうと手を押し付ける。

「……っ、！」

「ね、やばいでしょ？　やばいんだよね……だから、もうちょっと後ね？」

布ごしでも全然わかるぐらい熱くて、どうなってるのかよくわからないぐらい硬くなってるのがそこにあった。手を押しつけて、そのまま少し擦られる。勝手に手を動かされているのにも関わらず全く拒否がでなくて、そこから目が離せなくなっていると、興奮を抑えるみたいに息を吐く声が上がって聞こえてくる。その声で、私の方がおかしくなってしまうそうだった。

志木くんの大きい手が、私の手を全部包むみたいにして触らせる。押し付けられるごりごりした感触。そのまま耳元に唇が寄せられて、ぽそりとつぶやく。

「……これ、入るようにしてあげなきゃいけないからさあ」

「……あ、ひ……♡」

これ、いれられちゃうんだ。志木くんの。こんなの入るんだろうか。でも今私の奥が信じられないぐらいぐちゃぐちゃになってるのって、そういうことで。手で触れているものに気を取られていたから、さっきまで触れていたところにまた指が伸びてるのに気づかなかった。ぐちゃ♡ と音を立てて、さっきよりずっとしっかり指が一本入れられて、頭の中が真っ白になる。

「ッ♡ つあ！♡ あ、あ、ふ、あっ♡」

「ん、うわ、え？ えーすごい濡れてんじゃん、何？ 想像した？ か
わいー……♡」

長い指がずるずるって中に入れられて、またずるずると引き抜かれる。浅いところも奥も、指の腹にザラザラと撫でられる。

「あ、あ……♡ う、あ、だめ、あっ……♡」

「ぐちよぐちよになっちゃったから、すげー動かしやすいね♡ どこが
すき？」

「ん、っ♡ わ、わかんないっ、あ……あ……♡」

「わかんないの？ 一人でやる時どうすんの？ 中じゃなくてクリのが
好き？」

指がつぷんと抜かれて、次はその上にある突起を皮の上からつんと触
る。よく知ってる刺激にびくりとしてしまう。「こっちも触ってあげ

る」と志木くんは濡れた指先で皮をぬるっと剥くように滑らせたから、絶対に敏感なところが空気に触れた。それはだめだって、自分で知っている。

「まっ、て……あ！♡　っん、♡　んゝゝッ♡♡」

「腰からビクビクしててかわいーね……♡　クリからきもちいーの、ぞくぞくくるよね♡」

剥き出しになったクリをぬるぬると上下に触られて、腰の奥から身体が熱くなる。頭の中の理性がどんどん溶かされてしまう。

「気持ち良かったら、気持ちいいって言って？　何されるのが好きなのか、俺に教えて？」

「あ、あ……♡」

「お前がどんなエロいことされたいのか、俺、全部知りたいなあ」

段々と、恥ずかしいとかがどうでも良くなってきた。私になっても多分志木くんは馬鹿にしないし、多分最後までしてくれるし。この男の子の前で素直になった方が、なんか、めっちゃ気持ちよくなれてしまう気がする。理性をちよつと残しながらもえっちなことで脳内が占められてきて、さっき本当はもう少しして欲しかったことを口にした。

「し、きくん、指……なか……♡ ずりずりって、されるの……」

「ん？ 中？ 中が好きだった？」

優しくクリをぬるぬるしていた指が下にズレて、中にずるっと容赦なく入った。

「あ、あっあ！♡ あ、う♡ あ、あ……♡」

「あゝほんとだ、クリより身体跳ねるじゃん、えっろ……」

気持ちいいところに当たると、勝手に腰が浮いてしまう。志木くんが独り言みたいに呟くのが聞こえた。

「えゝなに……？ お前は簡単にイけるクリより、中で感じるのが好きなんだ？」

「あ、すきっ……♡ ナカすきっ……」

「ここらへん？ この浅いところいっぱい押したげよっか」

志木くんの指が中で動く。いつも綺麗だなんてちよっと思ってた、長くて白い指が自分の中に入ってるって考えると、頭が変になっていく。

「あっ♡ つあ、あゝ……♡ う、あ、あっ、あ♡」

「うん、きもちいいね？ あっあっ♡て声止まんないね？♡ 奥も好き？」

「っあ、あ、あ♡ おまんこおく、やだあ、へんっ……！」

「そーだね、奥までとろとろだねー♡ 気持ちいいの止まなくてこんな濡らしちゃうんだ？」

人の指、きもちいい。自分でする時より全然奥まで入ってるのに、圧迫感とか怖さよりずっとずっと気持ちいいが先に来てしまう。もっとして欲しいけど、もっとされたらおかしくなってしまうそうだ。ただ声を出すしか出来なくなっていたところで、志木くんの指の動きがゆっくりになる。

「……ねー、本当に、初めてなの？ 初めてなのにこんなにえっちなん？」

「う、え……？」

急になんだか真剣な顔をしながらそう言われたから、少し焦った。

やっぱこんなになってるのって、変なのかも。そう考えている私の顔で

何かを察してくれたのか、志木くんはちょっと困ったように笑いながら言った。違うよ、そうじゃなくて。

「……そんな初めてが、俺でよかったの？　まあもうやめてあげられないけどさ……」

止まっていた指が、お腹側の浅いところをぎゅっ♡と押した。

「あ、あつ、あ……あ♡　やだ、そこやだつ、♡」

「おまんこのここ、ぎゅっぎゅ♡ってされるとどうなるかは知ってる？」

「まって♡　まってでちゃ、でちゃう、そこもうだめ♡　だめっ」

「あ、知ってるんだ？♡　うん、きもちいいーね、だいじょーぶだよ、出していいよ」

「あ、やだ♡　やだ、っあ、あ、あ♡　あ、あ……♡　ん、っ……」

脚に入ってた力がぐんと抜けて、頭が真っ白になって、自分の中からぷしゃと出てしまうのが耐えられなかった。あ、と思った時にはお尻の方までびちゃびちゃになって濡れていた。だから、出ちゃうって言ったのに、こんなに。

「あー、あーあ……♡ 待って、エロすぎ、笑えてくる。普段どんなオナニーしてんの、一人で」

「あ、あ♡ ごめんなさいっ……♡」

おまんこの中のぬるぬるとか、今噴いた潮だとかでどろどろになった指先を、志木くんの舌先がぺろと舐めた。やだ、きたない、ごめんなさい、混乱といった後のまだ真っ白な頭で、私は泣きそうになりながら志木くんの手を取ろうとしたけど「なんで謝るの」と志木くんはそれを制した。大丈夫だよ、謝らなくていいよ。

「志木くんはねー……そういう女の子、大好きだよ♡」

だいすき。その言葉で泣きそうになっていた気持ちがすんと落ち着いた。
た。

「……いやじゃ、ない？ わたし変じゃない？」

「いーよ、変じゃないよ、かわいいーよ♡ きもちかった？ イキながら
びゅっびゅって出して、脚ぴんって……いつもそうやってイクの？」

かわいいかわいい、いい子いい子って志木くんは私の頬にキスしながら喋る。そうしてる間にもクリにすりすり指が擦り付けられていて、また頭が真っ白になりそうに気持ちよくて、もうなんでもいいやって思えてきた。志木くんにもっと可愛いって言われたかった。

「うん、いく、浅いとこっ……♡ 指さわるとでちゃう……♡」

「……へー……でちゃうんだ、そっかあ……お前はひとりで、そんなえっちなことしてんだ」

私の返事を聞いた志木くんは一瞬真顔になって、ちょっと怖かった。でもすぐにいつもの笑顔に戻って、ずるんと指を入れてきたから「あ♡」と情けない声が出る。

「じゃあ、そんなえっちなお前の大好きなところに、ちんこいれたら、どうなっちゃうんだろーね……？♡」

入れられた二本の指は、私の中を広げるみたいに指と指の間がゆっくり開く。確かめるみたいに。

「は、いる……？♡」

「うん、そー、これが入るの、お前ん中に」

ドキドキする、こんなの初めてなのに。そう思うと中が濡れる。

「なに？　もしかして怖いより気持ちいいが勝ってる？　♡　えっちな
ねー」

また中から濡れたのがバレたのか志木くんは笑ってそう言った。ガ
チャガチャって音がしてベルトが外れて、やっと志木くんが服を脱いで
くれる。気づいたら手にはゴムがあつて、啜えたままびりと破いた。

「俺の指、きもちよかった？　俺はもうさー…興奮で、しにそう」

ゴムをつけてる動きは、何をどうつけたのか見ててもよくわからな
かった。さっき布ごしに触った時よりずっと大きい気がした。初めて見
る。男の人のってみんなこんな感じなのかな。まじまじと見てみると志
木くんが「あんま見ないでよ、恥ずかしいから」って、全然恥ずかしく
なさそうに言った。

ゴムが付けられた志木くんのが、さっきまで指で触られてたところにぬる♡ と擦り付けられた。摩擦がなくて、クリにぬるるされると、指で触られるのより数倍強い刺激が走る。

「あ、っ……♡ つん、う、は♡ あ、あ……あ、ん♡」

「あ……ちんこでクリすりすり気持ちいいね、俺も好き♡」

でもさ、俺もう我慢できないから、ごめんね♡ そう言ってぬぷ♡ と入ってきたのは初めて感じる圧迫感だった。

「ふ、っあ……！♡ んっ……ッ♡ あ、あ、なか、っしきく、♡」

「……っ、あ、ん……ね、俺のが入ってきてんの、わかる？ ここさっき指でいっぱい擦ったとこ、お前が潮吹いたとこ」

いっぱい指でいじられて、膨らんでいるとこにちんちんの先端が当たって、ぐって押されると、目の前がチカチカした。

「っんっっ♡ あ、あ、まっ……て、そこ、あ、っ♡」

「んー♡ なに、やばいの？♡ 入れてたら潮噴けないもんね♡ きもちいーの逃せないね♡」

「んっ、あ♡ あっ？♡ い、く、ばけなっ……♡」

「どーしたらいいか教えたげよっか、中でイクんだよ♡」

俺のちんこ入れられて、中で気持ち良くなってイクの、お前は。わかる？ 耳元で囁かれて、ずぶずぶって腰が進む。中に全部志木くんが入ってくる。

「っ、ん、ほら、入った全部……♡ はは、セックスしちゃった、同期なの……♡」

「ひっ、あ、あ♡ まって、あ、あ、あ……♡」

おまんこの中がみちみちって、いっぱいになる。上に覆いかぶさってる志木くんの身体は大きくて、いつも見ているシャツが脱がれてて。すぐくすぐく男の子だった、当たり前だけど。そんな人と、今、こんなこと。勝手に中をきゅうつと締め付けてしまうのがわかった。

「……ちよつと意識した？ さっきまでただの仲の良い会社の同僚だったのにな」

「あ、あ……、はあっ♡ あ、あ……♡」

「今はさ……こうやってお前は、ちんこつつこまれてんの、俺に」

「なか、なかすご、い……♡ なかの、おっき……、あっ♡」

「あーやば……死ぬほど興奮する……」

全部入れられただけで、動かなくても気持ちよかったのに、腰が動かされて奥にぐりぐりと当たる感覚がした。悲鳴みたいな声が出る。

「は……うごいていい？ ごめん、痛かったら言って……」

「あ、あっ♡ あ、んっ、ひっ♡ んっ……♡」

ごめんね、って志木くんがいいながら私の腰は掴まれて、ぐじゅぐじゅの音を立てながら押しつけられる。ずるずるって抜かれて、恥ずかしい音を立てながら肌がぶつかる音が聞こえるたびに、声を上げることしかできなくなる。

「あ……っ、あ、っやば……むり、気持ちいい、ちんこおかしくなる……♡」

「ん、あ、あ♡ っ、あ、……♡」

「ごめ、苦しくない？ 痛くない？ 俺絶対入れる前よりすげーデカくなってる……きもち良すぎて……」

初めてする時って痛いって聞いてたのに、想像していたのと全然違う。聞いてない。こんなに気持ちいいって、勝手に変な声がいっぱい出るって、知らなかった。

「ちゃんと息して？ 最後までしたい、絶対っ……ごめん、やめてあげられない……」

「あ、あ♡ あ♡ さいご、まで、してほしっ……♡」

「あゝ可愛い……ちんこきもちい？ ちんこでなか、ぐちゅぐちゅされんの、きもちいい？♡」

「っ、ん、うん、んっ♡ しきくんの、きもちい、♡ いっ♡ あ♡ なかすき、♡」

「むり、かわいすぎ、ゴムつけてなかったらやばかった、すぐ全部出た……」

志木くんは私の身体を起こして、脚の間に座らせた。繋がったまま
で。入ってたちんちんがさっきまでと全然違う、奥のところにぐり♡
と当たる。あ、やばい。

「いっ……♡ あ、っ……っ♡♡」

「あ、いった？♡ 嬉しい、どこが好きなのか覚えた？ 全部覚え
て？ どこ？」

おまんこの奥、ぐりぐりつてされるところ。浅いところから深いところま
でずぶずぶ突かれるところ。いくいくつてなった時に、一緒にクリ触られ
るところ。志木くんにされる全部がおかしくなるぐらい、気持ちいい。

「そっかあ、全部きもちいっかあ、そうなんだ♡ 素直でかわいー
ね……本当素直、心配になるよ」

自分でなにをちゃんと言えたか、もうわからなかった。理性とか恥ずかしいとか全然無くなってしまうて、好き、気持ちいい、いっちゃう、出ちゃう、そんな下品なことばかり口からどんどん出してしまう。

「……俺以外にこんなこと、お願いしちゃダメだよ」

座ったまま下から突かれている動きが一瞬止まって。志木くんが、私の額にコツンと額をくつつけながら、そう言った。

志木くん、さっきからたまにこういう真剣な顔をしてくれる。かつこいいなって、ふやけた頭で思った。「聞いているの？」とちよつと怒ったように言われて、また下から突き上げられる。

「っ、ひ！♡ あっ、あゝゝッ♡ あ、なか、おくっ……いっちゃ、んっ♡」

「こんな、初めてなのに、突っ込まれて中でイくのが上手なんてえっちなこと、誰にも教えちゃダメだよ？ 変な男いっぱい寄ってくるよ」

「っえ……？♡　っあ、んっ、ん……っ♡」

「わかった？ わかったならちゃんと返事して。『抱いてほしい』なんて俺にしか言いませんって」

「あ、いわな、言わないっ、い、あ♡　いく、しきく、いっちゃう、また、っ……♡」

「あーっ絶対わかってね……も……っ……♡　……いっていいよ♡」

そのまま中でイってしまった後に、志木くんもゴムの中でぎゅってイってくれたけど、自分のことで一杯一杯で私は全然わからなかった。

志木くんがいく瞬間に、抱き潰すみたいに抱きしめられたことだけ、覚えてる。

「志木くんの、いく時の顔見たかった……」

「っ、ええ……？　すごいこと言うねお前……」

変なこと言ったかな。そう思ったけど、終わってベッドに横になっても、まだふわふわした頭で深く考えられなかった。気持ちよかった。すごく。でもこの後ってどうするんだろう、シャワーとか浴びるのかな。髪って洗うのかな？　もう終わったから洗ってもいいのかな。ていうか次会社で会った時は、何も無かったようにできるんだろうか。志木くんはできそうだけど。

行為後の行為の方がわからないことがいっぱい、とりあえずベッドの中から動けずにいると、志木くんがちょっと気まずそうに「あの」と

声をかけてきた。こちらまで緊張してきて、何を言われるんだろうと思
いながら聞き返す。

「な、なに……？」

「まあ、あのさ……来週からも、会社では普通にするけどさ……」

「うん………」

「気に入ったなら、またしょっか……？」

慣れてる男の子って、こうやって遊ぶ相手増やすんだ！　へらりと笑
う志木くんをみながら、私は謎の感動をした。

【体験版ここまで　製品版は横書きを同梱しています】